

#### (四) 悪夢

皇帝の来訪は、少なくともアンネローゼにとっては特別なできごとではない。

政務がよほどの繁忙さを極めている時を除き、フリードリヒ四世はその私的な時間のほとんどをアンネローゼの許で過ごすのを常としていた。政治にも軍事にも関心を示さない皇帝が政務に忙殺されるというのは矛盾した表現だが、事実でもある。皇帝の意思や嗜好に関わらず、政治・軍事に伴う催事は発生し、皇帝の御名御璽を必要とする書類は常時大量に発生し続ける。大部分を國務尚書を初めとする臣下たちに委嘱し、あるいは権臣たちによる不当な独占に委ねたとしても、偉大なる始祖ルドルフの定めた皇帝としての義務から完全に自由になることは不可能だった。

フリードリヒ四世は内治に特段の治績を持たない。皇帝自身がシュミットバウアー男爵夫人に語ったように、対自由惑星同盟戦での莫大な戦費は別として、国库は底を突いたに等しい状態が続いている。のち、カール・ブラツケとオイゲン・リヒターが批判した言葉を借りるならば、この時期の銀河帝国の国家予算は、新たな内治のための費用を割く余地もないほどに硬直し切っていた。戦費以外のほとんどの予算は門閥貴族の懐を潤わせるためにのみ立案され、計画された事業に固定的に振り向けられて久しかったのである。

従ってフリードリヒ四世の治績と呼べるもののはほとんどは自由惑星同盟に対する外征であり、外征に関わる様々な政務こそが、この無気力な皇帝を執務室へ拘束する政治的な催事にほかならない。直近ではヴァンフリート宙域への出征軍の凱旋がそれだった。帝国政府は『大勝利』を謳い上げ、皇帝臨席の許に大々的な勝利

式典を催した。実質的にはヴァンフリート宙域を制圧することもできず、辛うじて『叛徒どもの中で少将なる地位を与えられた者一名他、多数の捕虜』を得て、その前進補給基地の一つを壊滅させた程度の結果でしかなかったにしても。

そうした事情もあり、フリードリヒ四世がアンネローゼの館を訪れたのは数日ぶりのことで、祝勝会を初めとするいくつかの式典の騒ぎの名残が、帝都の中心街から外縁部へ移りかけた日の午後だった。

この日は、皇帝の希望もあり、アンネローゼは軽食と好みに冷やした白ワイン、そしてデザートデザートの菓子を用意して皇帝を出迎えた。

普通、皇帝の来訪に際してアンネローゼは特別なことは何もしない。特別なねぎらいの言葉をかけることもなければ、食事を手ずから用意するということもほとんどない。わずかに、ワインや果実酒などを皇帝の好みに冷やしておくことや、時にはコーヒールコーヒールや紅茶の準備を整えておくこと、あるいは彼女が希望し、内務省が許可をすれば手作りの軽食や菓子を用意することもある。許可が必要なのは、皇帝の口に入るものは、その材料のすべてが吟味され、検査されたものでなければならぬため、許可が下りない時の理由は決まって『食材の用意が間に合わない』だった。

言葉をかけないのも皇帝の希望だった。

「言葉など要らぬ。そなたの顔を見れば、そなたが予を待っていてくれたのか、それとも私の顔も見たくないのを取り繕っているのか、その程度は一目で分かる。心と裏腹な言葉など、宮廷の中心だけで沢山じゃ」

仕え始めて数ヶ月、あるいは一年あまりを過ぎた頃だったかも知れない。皇帝の言葉をアンネローゼは静かに肯い、皇帝を迎える言葉を探すことを止めた。

アンネローゼが皇帝への拒否や嫌悪を胸に抱いていたとしても、少なくとも皇帝が彼女の表情にそれらの悪感情を見いださなかったことは確かだった。『今にお飽きになる』、『三月か、半年か』、『次の寵姫にこそ、我が娘を……悪意と底意地の悪い期待に満ちた廷臣たちの囁きをよそに、皇帝の足がアンネローゼの館から遠ざかることはなく、彼女がこの西苑に館を賜つてすでに七度目の年を迎えていた。

皇帝はアンネローゼの給仕で軽食を摂り、好みの白ワインのグラスを傾ける。冷やし具合が丁度好みの通りであつたらしく、満足げなため息とともにテーブルに戻したグラスが、一息で半ば近くも空になつていた。

「酒が過ぎる、と言いたそうじゃな」

アンネローゼが眉を蹙めるのに気づいたらしい。フリードリヒ四世が咽喉声で笑つた。

「昨夜もかなりお召し上がりになった、と伺つております」

「余計なことを告げ口する奴がおることよ。予が飲みたいだけ飲んで何が悪い。予の身体ではないか」

「……」

「お為ごかしに予が身体を氣遣つてみせる者に限つて、陰に回つては予が一体いつまで生きているつもりなのか、さつさと次の者に交代せんか、と毒づいておる」

言い差して、フリードリヒ四世は慌てたようにアンネローゼの目をのぞき込んだ。

「おお、これはあなたがことではないぞ。そなたが予の死を願つている、などと言つたわけではない」

「はい」

「そなたは憂い顔も美しいの」

ふと皇帝が口調を変えた。

「じゃが、笑顔はもつと美しい。そなたが笑つてくれるならば、どのようなことでもしてやりとうなる」

表情の選択に困り、アンネローゼは顔を伏せる。冗談に見せて皇帝が本心を語っていることを知つていた。『お戯れを』などと軽く受け流してもいいのかも知れないが、それは皇帝との会話をゲーム扱いするに等しい。少なくとも、アンネローゼは皇帝との間でゲームめいた駆け引きはしたくなかつたし、またそれができる自分だとも思つていない。

「以前にな、グリンメルスハウゼンに、同じことを言つてやつた、するとどうなつたと思つ？」

「……」

「予とすれ違う女どもが皆、顔をしかめておるのよ。何を勘違いしたものでやら……そうじゃ、この話を存じておるか？」

「響みに做う……のお話でございますか？」

「そうじゃ、それじゃ」

後宮に納められてから、アンネローゼも『皇帝の寵姫たるにふさわしい』教育を与えられている。皇帝が持ち出したエピソードも、その時に学ばされた古典の中にあつた。重い病に苦しんでいた美女が、苦しさの余り眉を蹙めていたところ、笑顔の時よりもさらに美しく見えた。それで宮中の女たちが彼女の真似をしてしめ面をし始め、皇帝を呆れさせた、というものだ。フリードリヒ四世自身も何度か冗談の種に口にしてはいたが、この日の皇帝は記憶にいささかの混乱をおこしているらしかつた。

「時の皇帝が、その美女を笑わせよつとして、国庫を傾け、傾けすぎてついに国を滅ぼしてしまつたそうじゃ」

「陛下……それは……」

「ん？ そうか、これは別の話じゃつたようじゃな。まあ、そついで」

うことじゃ。そなたは余り笑わぬが、無理に笑ってみせるのも興ざめじゃと言ったのも予じゃったからの」

これは要するにアンネローゼを笑わせたいがゆえに、敢えていくつものエピソードを突き混ぜて見せたということなのだろう。了解した、というわけでもなかったが、アンネローゼは思わぬ類が緩むのを感じた。フリードリヒ四世は満足げに頷き、彼独特の干渉らびた笑いに咽喉を震わせた。

「そうじゃ、グリーンメルスハウゼンで思い出したが、妙な上申をしてきおつての。まあ、あの年甲斐に骨折りました功に免じて認めやうだが…」

「それは…どのような？」

「大尉をな、少佐にしてやってくれと。そうじゃ、グリーンメルスハウゼンは大將にしてやった。自分が大將になったついでに、この者を少佐にしてやってくれ、とな」

心臓が跳び上がったような気がして、アンネローゼは思わず胸を手で押さえた。

皇帝は宮中や政治向き話を一切しない。少なくともアンネローゼの許にいる間、彼女に向かつては国政に関わる話をしたことがない。まれに話題に出るのが、大公時代からの友人だというグリーンメルスハウゼン子爵だったが、それすら、さきほどのような冗談を口にするための話の枕のような存在でしかないようだった。

寵姫を政争に巻き込むまいとする、フリードリヒ四世なりの配慮なのだろうと思う。正鵠を射ているか否か、自信はなかったが、それがアンネローゼの理解だった。

極少の例外が、彼女の弟：ラインハルトに関する話題だった。奇妙なことだが、皇帝はラインハルトに対して悪意を抱いていない。むしろ、ラインハルトを話題にすることを好んでいるような

節さえあり、それがアンネローゼにとつては安堵でもあり、同時に不思議でもあった。彼女から見てさえ、弟が皇帝に好意ずくの忠誠を誓っているとは見えない場合がままあったらだ。もっとも、この皇帝に個人として好意を抱いた上で、至尊の存在として畏敬している人間は決して多くないらしい。ラインハルトは、少なくとも立ち居振る舞い、言葉遣い、そして戦場での実績、いずれにおいても皇帝への絶対的な忠誠を示して見せているから、皇帝から疑惑の目で見られるということはないと思えるのだが。

「なんと言ったかな：そなたの弟の副官を務めている者じゃそうじゃ」

また心臓が飛び跳ねた。

「ジーク：フリード・キルヒアイス…のことでございましょうか陛下」

いつもの習慣で「ジークのことでございましょうか」と口にした、狼狽して言い直す。そうして、うるたえている自分に改めて気づき、さらに鼓動が激しくなるのを実感した。皇帝がジーク、ジークフリード・キルヒアイスに興味を示そうとは、これまで考えたこともなかったのだ。

「そうじゃ、そのような名じゃった。グリーンメルスハウゼンめが妙に鼻厘しおつてな。予は、そなたが弟を少將にしてやっただけで十分と言つてやったが、グリーンメルスハウゼンがの、妙に、そのキルヒアイスか、その者の地位にこだわりおつて、予も根負けしたわ」

「それで少佐に？」

なぜか、微かに残念な気がした。

「うむ。少佐が一人や二人増えても構いはすまいて…ふむ、そなた、キルヒアイスなる者を存じておるのか？」

「え…あ、はい。よく存じております」

なぜか、それ以上を皇帝に問い質されなくなかった。問われ、答えていくことで、よくないことが起こりそうな、そんな漠然とした不安がわき上がってきて、アンネローゼは微かに震えた。

先日、ヴァンフリートから凱旋してきたラインハルトたちと会ったときに、ラインハルトはキルヒアイスが大尉のまま昇進できないことに苦情を言っていた。それに対して、アンネローゼは皇帝に口添えする旨を約束してきたのだ。

ジーク自身は無理な口添えは無用にしてほしいと言っていた。それが彼女の立場を慮ったことだとはすぐに了解できたから、彼の昇進について助力を惜しむつもりはなかった。だから、今日明日の内にジークの名が彼女と皇帝の共通の知識となるはずだったのだが。

「どのような者じゃ？」

母を失い、わずかな財産もなくして、父とともに逃げるようにして移り住んだ下町の一角：自らの学業も断念して、父と弟のために亡き母の代わりとなろうと決心したばかりの彼女の前に現れたのが、背の高い、感じのいい赤毛の少年だった。

『弟と仲良くしてやってね』 思わずそう言ってしまった。軽い気分で言ったわけではない。友人の少ない弟が心許せる友人を持つて欲しいと願い、この子ならという自分の直感を信じての言葉だったことは間違いない。しかし、一〇歳の少年の、まだ柔らかな心に、彼女の最初の一言がどれほどの強さで焼き付けられるものか、一五歳になっただけの彼女には想像もつかないことだった。意図しての言葉でないだけに、まっさらな少年の心に刻み込まれた言葉の重さはより重く深いものとなっただけに違いなかった。

「はい：あの、隣家に住んでいた、弟の友人です。同い年の……」  
「なんと、そなたが弟と同い年というか：幾歳であったかな？」

「一八歳にございます、陛下」

「一八で少佐とは：うむ、そなたが弟も一八で少将じゃが：なるほど、そなたが弟が軍に伴ったか？」

「さようでございます」

「そうじゃ、思い出した。そなたをあの者が訪なう時、かならず伴っておるとやという若者じゃな……」

それきり皇帝は沈黙に陥り、アンネローゼはほっと息をついた。なにゆえの緊張かは分からなかった。ただ、これまでラインハルトにのみ注がれていた皇帝の視線がジークにも及び始めたことが、奇妙なまでに動揺を誘ったのは確かだった。

ラインハルトが幼年学校に入るに際してジークを誘い、ジークがためらいもなくそれに応じたとき、アンネローゼは自分が彼に何を頼んでしまったのかを初めて察した。彼女は恐れた。弟の友となってくれという彼女の言葉に、ジークは彼のすべてを擲つてもラインハルトのために、という形容を被せて理解したに違いないことを察したからだ。後宮に納められ、権力者の傍らで時を送るに従って、そのような誓いがしばしば当人の生命をもつて贖われるということも知識の裡に入ってきた。アンネローゼは弟の傍らに侍している赤毛の少年の姿を祈るような思いで見えるようになっていた。弟が訪れてくるとき、その横に赤い頭が並んでいるのにこの上もない安堵を覚えるようになっていたのはいつの頃からだっただろうか。

その一方で、栄達するに従って圭角を丸めるどころか、ますますより高処を見上げて天に翔け上がるかのようなラインハルトの生き方が彼女の不安を煽った。

どうか、生き急がないで欲しい。ほんの少し歩みを緩めても、行き着く先が逃げていくわけでも、ましてそこへたどり着けないわけでもないことを察して欲しい。逆に急ぎすぎれば過ぎるほど、

その歩みに付いていけないが故に、去つて行く者、失われて行く者が増えるのだと言つてを。

だけれど、もはや彼女自身ですらラインハルトにそれを気づかせるのは難しい。それができるとすれば、ただ一人。だが、それを願えば、ますますあの日の言葉をさらに強めて、あの赤毛の少年の胸に打ち込むも同然のこと。弟とその親友にこそ良かれと思うそのことが、彼らに取り返しのつかない不幸をまねくのではないか：

ラインハルトを制し得ぬと思つのは、アンネローゼが自らの裡に微かな引け目めいたものを見いだしていたからかも知れなかつた。最も激烈な戦場にその身をさらし続けるラインハルトとジークに引き比べて、ともすれば、今、現在の日々に自らを見失いそうな自分を確かに感じていたからだ。

人は苛烈すぎる境遇にも耐えることはできる。ただ、それが数年も、あるいは数十年も続くことには耐えられない。精神は耐えられても肉体<sup>からだ</sup>が、あるいは意志の制御を受け付けぬ精神<sup>こころ</sup>の深奥必ず壊れ、崩れていく。日常の内に平穩の時を、あるいは平穩をもたらししてくれる可能性を求めない人間がいるとすれば、それは異常者か、あるいは天才だけである。たとえば、ラインハルトその人のような。

後宮に納められて七年。必ずしも完全な平穩と安らぎを得られる場所こそないが、皇帝の庇護下の後宮での生活が、ある意味で穏やかで平和なものであつたことは間違いない。ラインハルトとは異なり、彼女が明らかに乱よりも治を、動よりも静を好む人柄だつたことも確かである。その彼女が、皇帝との日々にある種の安住の思いと、それをもたらしてくれた皇帝に真摯な好意を抱いたとしても非難されるべき謂われはない。

なぜか頬に感じた熱を、ジークフリード・キルヒアイスの面影

を思い出したことがもたらしたと悟り、アンネローゼはその強さを西日に感謝した。

「そうじゃ、今ひとつ、そなたに伝えておくことがあつたな」

訝しげに視線を上げたアンネローゼに、皇帝は告げる。そなたの許の女官長に補佐を付けることにした、と。

「補佐でございますか？」

女官長はアンネローゼの公的な仕事を取り仕切り、執事のコルヴィッツがグリーネワルト伯爵夫人としての彼女の私的な生活を差配する…ことになつてゐる。

アンネローゼ自身は決して多忙の身ではない。事実上の妻として座を与えられているとは言え、彼女自身の身分は一介の寵姫に過ぎず、公的な場に皇帝と行を共にする資格は持たない。また、彼女が地位や利権の口利きをしないこと、有力な門閥貴族の支持を持たないことも広く知られているので、獵官を目的に彼女のもとを訪れる者はほとんどいない。形だけ女官長が置かれていても、實質には執事のコルヴィッツ夫妻だけで彼女の身边を切り回すには十分だつたのだ。ゆえに女官長は置かれているが、西苑全体で一人だけであり、アンネローゼに専任しているわけではない。

「…ではございますんか？」

「霸王の話を、そなたは知つておるかな」

「霸王でございますか？」

ひとたびは天下を制し、力は山を抜き、その気は世を覆つとまで讃えられた英雄がいた。アンネローゼが話の行き先を見失うほど唐突な話題の切り替えだつた。

言葉に詰まつている彼女を尻目に皇帝は言葉を続ける。しかし、時に利あらずして、霸王と讃えられた英雄の帝国に最後の時が訪れる。霸王と共に最後の戦いに臨んだ寵姫は望んで自らの生命を断ち、霸王は落ち延びて再起を期せよとする部下の言葉を笑い捨

て、寵姫の後を追った。

これも聞いたことのある逸話に違いなかったが、アンネローゼは皇帝の意図をはかりかねた。ただ、皇帝の口調がいつになく重たい。上手くもない冗談があるいは薔薇の話をしているか、あるいは沈黙を守っているか。アンネローゼの許での皇帝は、それが普通だった。傍目で見ている、大帝国の帝王の威厳はかけらほども感じられなかったが、皇帝と呼ばれているこの一人の老人がくつろいでいる様子は確かに感じ取れたのだ。

が、今の皇帝の口調は明らかに常のそれではなかった。

「落ち延びたところで、再起はかなわなかったであろうよ。その者の命運はもはや尽きておつたゆえ、敢えて逃げておれば、こうして物語として今の世にまで伝わることもなかったであろう。あれよ、生命惜しさに臣下を見捨て、寵姫をも死なせて生きながらえた浅ましき男よと、そうあざ笑われ、挙げ句にはその者を逐うた当の相手にまで情けをかけられ、老いさらばえていったことであるうさ」

「陛下…?」

この方は、物語の英雄の最期に自分を重ねている。自らの最期が天寿を全うしてのそれではなく、敵に逐われての窮死であろうことを思い極めているのではないか。

「彼の霸王は、自ら我が頸を断ち、最期まで従つた部下に与えたそうな。敵に降る時の土産とせよ、と言つてな」

「陛下?」

「それはそれで武人らしい、華やかな最期というべきじやろう。ただ、ひとたびは天下に覇を唱えたほどの男が、敵に追い回されたあげくに、路傍で自死したのがどうも惨めに思われてならぬよ」

「宮殿の奥で敵を迎えた方が帝王らしかったとお思いですの?」

「そうじやな。予であれば、新無憂宮が奥で敵が来るのを待ち、一気に火を放つて予も予の臣下どもも敵どもも共に滅び去る道を選んだ。やも知れぬ。新無憂宮すべてが火に包まれれば、これはなかなか華やかな葬送と言えような」

「不吉なお話でございます、陛下…」

「怒つたか?」

皇帝は笑う。オレンジ色を帯び始めた陽光の中、居室のたたずまいが奇妙なほどにくっきりした単色のコントラストの中に浮かび上がっていた。ふ、とその姿に重なって影のようなものを通り過ぎたような気がして、アンネローゼは目を睜いだ。西に傾いた日差しを、足早に通り過ぎた断雲が遮つただけだったのかも知れないが、アンネローゼは氷の刃が通つたような冷たさを確かに胸に感じる。

「陛下?」

「アンネローゼ…」

聞き慣れているはずの皇帝の声が、聞き取りづらいほどに噎れて聞こえた。

「予が滅ぶときに、そなたも共に滅んでくれるか…」

皇帝が何を言っているのか、しばらくの間、理解ができなかった。

「陛下…?」

「どうじや、予と共に新無憂宮の中で燃え尽きるは嫌か?」

「陛下、どうなさつたのですか?」

つと皇帝の前に歩み寄る、その手を、不意に皇帝がぐいと握りしめる。その手指に込められた、老人めいた外見からは思いもかけぬほどの力に、アンネローゼの細い手首が軋み、悲鳴を上げる。苦痛をかみ殺す彼女を引き寄せ、抱き寄せる。皇帝の手には緩慢だが、それゆえに抗いがたいほどの力が込められ、アンネローゼ

に抵抗を許さなかった。

間近に引き寄せたアンネローゼの白哲を、結び上げてあつた黄色の髪が乱れ、覆い隠す。苛立たしげに払いのけ、皇帝は彼女の青玉の瞳をのぞき込んだ。ふだんは活力のない濁った瞳が、このときは異様な、ぎらぎらと燃え立つようなかざりを湛え、アンネローゼは魅入られたようにその瞳に視線を吸い寄せられて、離すことができなくなった。

「彼の霸王が寵姫のように、そなたは予と共に滅びを選ぶか？ いや、選んでくれるか？」

皇帝が突然、どのような思い、幻想、あるいは妄執かも知れない…に取り憑かれたのが、それは分からなかった。分かったのは、皇帝が自らの未来に尋常ならざる死への道を見いだし、その道への同行を彼女に求めている…のだからということだけだった。

何故かは知らず、拒否の思いは湧かなかった。

金縛られたように動きのつかない身体の中で、アンネローゼはつと、おとがいを引いた。皇帝の言葉への肯定を示す仕草だった。

目覚めた時、アンネローゼは全身を冷たい汗に浸されているのを感じた。汗が冷えて身体の表面が凍り付くように冷たい。咽喉から飛び出しそうなほどの勢いで心臓が波打っていたが、身体の内側も凍えるように冷たかった。

寝室の中はまだ闇の支配が強かったが、微かに浮かび上がる調度類の輪郭が、すでに朝の足音が地平線のすぐ袂にまで達していることを示している。

「陛下…？」

眠っている皇帝に、目覚めを促して声をかける…本来、寵姫としては固く戒められている行為を、彼女は敢えて行った。戒めを

守るには、彼女をたたき起こした夢魔があまりにも生々しかったからだ。規則正しいとは言えぬ、やや苦しげな寝息は彼女の呼びかけにも目覚めの気配を示さなかった。アンネローゼは微かに安堵の息を付き、そつと寝台から滑り降りた。ほの白く浮かび上がる裸身にガウンをまとい、シャワールームへつま先を向けた。センサが、視覚を刺激しないレベルに抑えた薄いオレンジの光を瞬かせた。彼女の起床を感知し、衛兵と侍女の詰め所へ知らせたのだ。

シャワーの熱さが、夢を思い出させた。限界までシャワーの温度を上げているにもかかわらず、まるで熱さを感じなかった。身体の内側から震えが起き、どつしても抑えることができないのだ。夢魔の見せる悪夢そのものだった。いや、悪夢と言いつれぬからこそ、なお一層、悪夢を見たという怯え、万に一つも正夢となるのではないかとの恐れが、彼女の身体を激しく戦慄かせていた。アンネローゼは、皇帝とともに新無憂宮にいた。新無憂宮の戴冠の間の玉座。歴代の皇帝が至尊の冠をその頭に戴いてきた、皇帝の許可無くしては何人たりとも入室を許されない、神聖不可侵の1室。フリードリヒ四世はその玉座に座し、アンネローゼ自身はその隣。あろう事が皇后のみの着席が許されるはずの玉座に座していた。夢の中の彼女は、しかし、そのことに何らの疑いも不信もいだいてはいなかったのだが。

そして…新無憂宮を包むもの、それは紅蓮の焔だった。フリードリヒ四世自身の言葉通り、広大な新無憂宮すべてが一つの巨大な溶鉱炉と化したかのように、五彩の焔を帝都の空に吹き上げていた。燃え上がる焔の巻き上げる轟音と建物の崩落音が耳を聳さんばかりに鳴り響き、物が焦り爆ぜる音と熱の匂い、肌をじりじりと灼き始める熱風の息吹すらも、現実であるかのように感じ

られた。いや、それが夢と分かったのは目覚めた瞬間であつて、アンネローゼはその直前までそれを現実のこととして感じていたのだ。

自分はなぜここにいるのだろう。なぜ、新無憂宮が燃えているのだろう？

ぼんやりとそんなことを考えていたことまで、はつきりと記憶に残っていた。

「知りたいか、アンネローゼよ」

不意に皇帝が話しかけてきた。皇帝の顔には表情はなく、目はばかりと空いた洞穴のように見えたが、声は確かに彼女が七年の間仕えてきたフリードリヒ四世のそれに間違いはなかった。

「知りとうございます、陛下」

答えながら、ああ、そうなのか、と納得する自分がいた。皇帝は彼女に滅びを共にせよと求め、彼女はそれを肯った。今、皇帝は滅びようとしている。ゆえに、自分はそれに従おうとしているのだ……と。

「なぜ、陛下がお滅びになるのでしょうか？」

「予が自ら滅びることはない。予を滅ぼす者がある。その者が癡ち、予を滅ぼそうとする。その時が来た。ただ、それだけのことじゃ」

訊いてはいけない、それは訊いてはいけないことだ……アンネローゼの中で、もう一人の彼女がそう囁いていたように思う。それを訊けば、もう後へ戻ることはできなくなる。

もう一人の自分？ 後へ戻れなくなるとはどういうことだろう……もう一人の私とは誰？ どこへ戻れなくなると言うの？

応えはなく、アンネローゼは問いを口にした。

「誰が、陛下を？」

「分からぬか？」

風が鳴るような虚ろな笑いが応じた。

「慌てるでない……今、その者が来る」

「その者？」

「そうじゃ。その者が……な。そなたを『救い』にここへ参るゆえ、今しばらく待て」

扉から這い込む煙が濃さを増し、空気がちりちりした熱さを高めていく。火事だ、逃げなくては……と思う一方で、逃げる必要はない。自分は皇帝と共に滅びの道を行くと誓ったのだからこの思いが身体を玉座に張り付かせて動かさない。

「行かぬのか、アンネローゼよ」

皇帝が問うのに、アンネローゼは首をかしげた。問われた意味が分からなかった。

「逃げると仰いますの？」

「そうじゃ……いや、待て。予が語るまでもあるまい」

皇帝が指さした先……その腕がいつの間にか枯れ木を思わせ、干涸らびたミイラめいたものに変わっているのに、アンネローゼは初めて気づいたが、恐怖は感じなかった。

恐怖は、皇帝の指した先から来た。

扉が軋み、揺らいだ。

瞬間、アンネローゼを襲ったのは激甚なまでの恐怖だった。

「……！」

その扉を開いてはいけない。扉の向こうにいる者を導き入れてはならない。その者の顔を見てはならない。

「だめ……だめ、いけない！」

立ち上がり、扉を押さえに駆け出そうとする、その肩を、すさまじいほどの力で引かれた。

「落ち着くがよい。慌てて迎えずとも、向こうから来る」

「違います、陛下。あの扉を開けては……」

「愚かなことを申すな」

再びかさかさした笑い声が応えた。すでに皇帝の顔は輪郭を曖昧にし、人の姿とは見えなくなっていたが、それでも答えるのは皇帝その人の声に他ならない。

観音開きの扉の中央に紅の光が入り、耳を刺すような軋みと共にゆっくりとその幅を広げていく。両手を左右一杯に広げ、扉を押し広げているのは、驚くほど背の高い人間で、顔は：その背後を彩る紅蓮の揺らめきの影となつて見えない。唯一はつきりと彼女の視界に届いたのは、それ自体が焰と見まごうばかりの深紅の色彩を湛えた、その人物の髪だった。

「アンネローゼさま！」

声が届いた。恐怖が灼熱となつて爆発し、アンネローゼを包み込んだ。

「そ…ん…な…」

「アンネローゼさま！」

燃え上がるような髪と深いブルーの瞳。初めて会った時は、彼女自身の胸元くらいまでの背丈しかなかった五歳年下の少年は、今や見上げねばならないほどの長身と、そしてまっすぐな真摯な目を持った若者に変貌を遂げていて：今、その目はまっすぐに彼女に向けられている。目をそらすことも伏せることもできない強さで、まっすぐにアンネローゼの目を見つめていた。その視線の訴える意味、青い瞳が一杯に湛えた思いを見て取り、理解するにはただの一瞥だけで十分過ぎるほどだった。

「お救けに参りました、アンネローゼさま！」

「どうして…あなたが…なぜ…？」

皇帝を滅ぼす者があるとすれば、それは彼女の弟以外にあり得ない…論理以外の部分でアンネローゼは自分がそう理解していたのだ、と思つた。だから、ここに現れるのはラインハルトのはず

であり、ラインハルトが現れたなら、あるいは自分は弟の手を取ることなく、皇帝と共に焰の中に消える道を選んだかも知れない。少なくとも、今、感じている恐怖：それが、恐ろしいもの、嫌なもの、憎むべき者を前にしたがゆえではなく、むしろ、ここに現れて欲しいと最も強く願っていた存在を目の当たりにしたことによる驚愕に類するもの。無論、彼女自身にとつては自身の思いがはずれにあるのかすら、もはや分明ではないほどの混乱と惑いのただ中であつたのだが。

これは罰なのだろうか。混乱する想いの中で、アンネローゼはそう思う。後宮での日々に、過去への想いもなければ未来への憂いもなく埋没しそつになつていた自分の罪への、これは罰なのだろうか？

「それは違つ」

皇帝の声が否定した。

もはや玉座の辺りには人の形すらなく、凝つたような闇がふるふると震えて見えた。闇が、その腕を伸ばして彼女の右の肩と腕をとらえ、信じられないほどの力で引き留めている。

「その者は、そなたが呼んだ者に他ならぬ」

「陛下！」

「アンネローゼさまを離すがいい、皇帝！」

アンネローゼの声に赤毛の若者の声が被さつた。いつのまにか彼は玉座の附近にまで駆け上がり、アンネローゼの左手を取つていた。

「お前のあるべき時は終わった。せめて静かに過去の記憶となり、アンネローゼさまを解放つがいい」

「いいだろう」

闇が嗤つた。ふるふるぶるぶると震える生命ある闇の上げる笑い声は、乾いた紙をこすり合わせるに似て、作り物めいて響く。

「果たして解き放たれたいと思つておるかな」  
「なに？」

「まあ、よい……まあ、解き放つてやろう」  
「す」と左の腕から肩が軽くなった。

闇が退いた。  
周囲の明るさが、にわかを意識の中に蘇つてきた。空気は灼熱の熱さを帯び、すでに周囲すべてが燃えさかる焔のただ中であつた。

「行きたければ、行くがよい。予への誓いが、そなたにとつて一顧の価値すらないというのであれば、今、直ちにその者の手を取り、予が許を去るがよい」

「アンネローゼさま、早く」

赤毛の若者の手が、強く彼女の左手を引く。

「！」  
「身体がまったく動かなかった。」

「アンネローゼさま、どうなさつたのです」

「予を捨てて、愛しい者の許へは走れまい」  
「粘り着くよつな、毒を滴らせているよつな、それでいて満面の喜悅を湛えた声が耳元で囁いた。」

「予もまた、そなたにとつて愛しき者にほかならぬゆえ……な」  
「嘘を言つな」

「よかるう。では、アンネローゼを予が許から引き離し、見事に連れて参るがよい。それができるのであればの」

ぐいと腕を引かれた。応じようとして、やはり身体は寸分も動かなかつた。

赤毛の若者の、真つ直ぐな青い目が驚愕に見開かれた。信じがたいものを見る目で、アンネローゼと、皇帝の玉座の間に視線を

走らせる。

玉座から闇が立ち上がり、広がって、アンネローゼの視界をく  
るみ込んだ。

「分かるであろう。アンネローゼは予が寵姫じゃ。予が最も慈しんだ女じゃ。それはつまり、アンネローゼもまた、ゴールデンバウムの連枝をなす一人として、その滅びからは逃れられぬ身となつたということじゃ」

それで分かつた、と思つた。皇帝の言葉への理解が生まれた瞬間、ある種の想いが胸の奥にすわりと滑り込んできた。何が分かつたのか、それは分からなかつたが、強いて言えば『諦念』と呼ぶべきものだったかもしれない。想いが胸の奥に座を占めた時、同時に全身の力が抜けた。

自分は、この場で滅ぶべき者なのだ。

赤毛の若者の姿がすつと遠ざかつた。嗤っているのは皇帝の姿をした闇か……いや、自分自身だつたのかも知れない。

「そなたが望みを叶えてやるつかの？」

「愛しき者を伴わせてやろう」

「なにを」

「なさるのですか……言葉は咽喉の奥に貼りついたままだつた。不意に周囲の焔が巨大な渦となつて巻き上がり、轟きながら室内を埋め尽くした。」

自らが焔の中に焼き尽くされる灼熱を、現実のものであるかのように感じながら、アンネローゼは恐怖と共に、見たと思つた。彼女と皇帝と同じく、赤毛の若者もまた焔の中で生ける松明と化して燃え落ちていったのを……

「ジーク」

熱さよりも恐怖と絶望が、アンネローゼを微睡みまどろの中からたた

き起こしたのがその瞬間だった。

肌の上を流れ落ちていく熱い雫を見つめながら、アンネローゼは打ち拉ひがれた思いに全身を取り詰められていた。

衝撃の大きさは、あれがすべて夢だったことだった。夢の中に現れた光景も、皇帝の言葉も、『彼』の出現も、そして玉座を離れることのできなかつた自分自身も、すべて彼女自身の心の裡から生まれたものに他ならなかつたのだ。

皇帝は、『彼』を『そなたにとつて愛しき者』と呼んだ。夢の中でこそ皇帝の言葉とは言え、それは彼女の心の奥底に潜んでいた想い以外の何ものでもあり得ない。

では、やはり、自分は彼を『愛して』いたのか。隣家に住んでいた、感じの良い少年…他人を容易には寄せ付けぬ子供だった弟の心にすら、何の困難もなく滑り込むことのできた唯一の存在。両親の許で約束されていたはずの穏やかな少年時代を捨て、弟と共に険しい闘いの道を選んでくれた、心優しき少年を…自分

は…  
だが、皇帝を、フリードリヒ四世を、猛火の中の墓標と化しつつある新無憂宮の中に置き捨てて、彼女一人、『彼』の手を取ることはできなかつた。

悪夢の結末…彼女一人ばかりか、『彼』までが滅びの焔の中に燃え崩れていった有様が、抑えようにも抑え切れぬ震えを起こさせ

た。  
七年前、後宮に入ったとき、自分には自分で左右することのできる未来が失われたと思つた。それはそれでも良かった。父の余生が保証され、弟の将来が確保されるのであれば…と。

しかし…あれは

言葉にはできなかつた。

言葉にした瞬間に、それが現実のものとなるのではないか。自分が皇帝と共に滅びを行くのはやむを得ないこととして、それに『彼』…ジークフリード・キルヒアイス…を伴ってしまうのではないか。思つまいとすればするほど、震えは止まらなかつた。

シャワールームのアラート・ランブが小さく瞬いて、アンネローゼを我に返らせた。

「どうかなさいましたか？ ご入浴の時間が長すぎるようですね、気分でも？」

「ごめんなさい。ちよつと考え事をしてしまったの…」  
応えて、アンネローゼは重いほどに水を含んでしまった髪に気が付いた。

「髪を濡らしてしまつたから、準備をお願いね」

「承りました、アンネローゼ様」

シャワーを止め、アンネローゼは重い足取りでシャワールームを出た。

せめて皇帝には、今の自分の動揺は知られたくなかつた。まして、自分がジークフリード・キルヒアイスを『愛して』しまつていられるかも知れないことなど…自信はなかつたが、今は、年に数えるほどしか弟とジーククに会える機会を持ってないことを逆に感謝したい気持ちで一杯だつた。

事実、この次に彼女が弟たちに会うのは八月の中旬。ラインハルトが、同盟軍の第六次イゼルローン要塞攻撃の迎撃のために出陣する直前であり、それはこの日から二ヶ月余りを経て後のことだつた。